

Title	法学研究 第六十一巻(昭和六十三年自一号至十二号)総目次
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1989
Jtitle	法學研究：法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.62, No.1 (1989. 1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19890128-0148">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19890128-0148</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 法学研究 第六十一巻 (昭和六十三年) 総目次

## 論 説

	号	頁	執筆 者
大正デモクラシーと黎明会……………	一	二	中 村 勝 範
—黎明会第四回講演会を中心に—			
日中戦争と日本のマスメディアの対応……………	一	四	池 井 優
近代日本社会調査史研究の課題……………	一	七	川 合 隆 男
—戦後転換期と朝日新聞社説—			
新聞の枠組設定機能に関する一考察……………	一	七	鶴 木 真
強制力と差別……………	一	二五	田 中 宏
権力概念の理論的規定をめざして……………	一	三三	霜 野 寿 亮
—〈主意思義〉的視点からの予備的考察			
脱工業社会のエネルギー・素材、技術、労働……………	一	二五	関 根 政 美
—脱工業社会の徹視的変動分析—			
マス・メディアの報道と政党支持に関する計量分析……………	一	二九	小 林 良 彰
生活史と「生の記録」研究……………	一	二九	有 末 賢
—ライフ・ヒストリーの解釈をめぐって—			
近年における日本を中心とした情報交流の変化……………	一	二九	伊 藤 陽 一
—ニュース報道と大衆文化—			
ナチス犯罪の追及と西ドイツ刑事司法……………	二	九	宮 澤 浩 一
—特に、ナチス犯罪追及センターの活動とナチス犯罪者の外泊に関する許諾の問題を中心として—			

刑事政策的視点による死刑廃止への一考察	二七	加藤久雄
身柄拘束下における余罪の取調べ	二〇	安富潔
過失犯と目的的行为論	二二	井田良
—過失作為の行為性に関する一考察—		
生殖医学の進歩と刑事法上の諸問題	二五	中谷瑾子
ノート「独居拘禁」	二〇	坂田仁
同時犯の意義並びに共同正犯の意義及びその範囲	二二	筑間正崇
毀棄、隠匿の目的と不法領得の意思	二五	豊田健
時効の制度倫理と援用の問題(一)	三一	内池慶四郎
—梅謙次郎とポアソナードを結ぶもの—		
会社の国籍(一)	三三	桜井雅夫
—アメリカの国際投資を中心として—		
フランス系ケベックの子供達におけるイデオロギー上の志向と政治的表象	三〇	K・S・クルティス 小戸と 久保康之 の訳
寺内内閣期における原・政友会の戦略	四一	玉井勝清
—解散・総選挙を中心に—		
時効の制度倫理と援用の問題(二)	三三	内池慶四郎
—梅謙次郎とポアソナードを結ぶもの—		
会社の国籍(二)	四三	桜井雅夫
—アメリカの国際投資を中心として—		
文明史観における政治思想	三七	多田真鋤
黎明会大阪講演会における主張の変化	三六	中村勝範
悔返権をめぐる一考察	三五	利光三津夫
レイモン・アロンにおける歴史と政治哲学	五〇	奈良和重

甲間外交の研究……………	五二七	池井	優
— 蔭介石總統の死去と日本の対応—			
ネガティブパラダイムとしての政治学……………	五二七	内山	秀夫
— 一つの政治学論—			
「日本社会学会」の設立とその後の経緯……………	五二九	川合	隆男
戦後社会史としての海外移住……………	五一三	鶴木	真
— 広島県沼隈町の事例研究—			
国家と政治— 選擇理論による分析……………	五二五	田中	宏
合意の限界……………	五三九	曾根	泰教
エジプト・一九五二年革命における社会経済改革の位置……………	五二七	富田	広士
日本社会の国際化と人種・エスニック集団関係……………	五二三	関根	政美
アメリカにおける代替的紛争解決運動に関する一考察……………	五三七	大沢	秀介
我國の有権者の投票行動と政治意識の決定要因に関する計量分析……………	五三九	小沢	良彰
法令政治と弾正台……………	五三九	笠原	英彦
— 奈良朝を中心として—			
THE EC INTEGRATION-PROCESS: A JAPANESE VIEW……………	五四〇	田中	俊郎
朝鮮半島の展望……………	五四三	神谷	不二
「モス・イタリクス Mos Italicus」の法学思想……………	六一	森	征一
— 中世ローマ法学の正義の学としての側面—			
災厄としての自由……………	六一七	クリスチャン・ベイ	内山秀夫
— 西欧世界における自由主義的個人主義の場合—			
脱工業社会の経営、組織、人的資源……………	七一	関根	政美
— 脱工業社会の微視的變動分析—			
いわゆる外国仲裁判断の効力に関する試論的考察……………	七三	山田	恒久
明治十八年・小笠原島兇徒聚衆事件裁判考……………	八一	塚	豊

対独開戦と日本外交……………	八	波多野 勝
—加藤外相と海陸軍—		
Japanische und deutsche Rechtsauffassungen im öffentlichen Recht……………	九	Carl Hermann Uie
「企業結合」概念の相対性……………	九	宮 島 司
民事訴訟における裁判官の指摘義務……………	九	H・ブリュッティング
アメリカ太平洋沿岸実業団渡清(一九一〇年)と日本の対応……………	九	石川 明
—実業界を中心として—	九	出口雅久
Die Grundsätze des Bonner Grundgesetzes……………	十	木村 昌 人
訴訟終了宣言と訴訟係属……………	十	Carl Hermann Uie
米国コージュネレション法制論序説(一)……………	十	坂原 正 夫
—電力会社による電気購入問題をめぐる主要判決を中心として—	十	藤原 淳 一 郎
エリック・フエーゲリンの政治哲学(一)……………	十	寺 島 俊 穂
明治七年司法省第一〇号布達施行直後の伺・指令……………	十	霞 信 彦
米国コージュネレション法制論序説(二・完)……………	十	藤原 淳 一 郎
—電力会社による電気購入問題をめぐる主要判決を中心として—	十	
エリック・フエーゲリンの政治哲学(二・完)……………	十	
三・一事件と黎明会……………	十	寺 島 俊 穂
レイモン・アロンにおける《イデオロギー批判》……………	十	中 村 勝 範
ジンメルと《一九二〇年代》……………	十	奈 良 重 宏
政治的多元主義と政治……………	十	薩 山 悦 生
ワイマル末期におけるC・シュミットの政治的位置について……………	十	萬 田 悦 生
世襲代議士と選挙区……………	十	中 道 寿 一
—広島二区を中心として—	十	市 川 太 一

ウィットフォージェルの思想形成……………三二  
 —一九二〇年代初期作品に中国論への出自をもとめて—  
 ヒュームと保守主義理論……………三二

研究ノート

西ドイツ簡素化法施行後における更新権の制限……………六〇  
 —西ドイツ民法(ZPO)五二八条の問題点—  
 不安の抗弁について……………二五

資料

明治五年・茨城県大砂浅吉兄弟仇討一件の裁判史料……………三  
 最後の明法紛失状……………四  
 スペイン改正手形・小切手法(一)……………七  
 —解題と条文の翻訳—  
 スペイン改正手形・小切手法(二)完……………八  
 —解題と条文の翻訳—  
 明治三年・吉田藩三間騒動の裁判記録……………九  
 ブラジル法、とくに訴訟法の形成およびサンパウロ州の裁判組織についての覚書……………一〇  
 (ブラジル法研究 1)  
 国際仲裁—ブラジル法からのアプローチ……………一一  
 (ブラジル法研究 2)  
 手塚 豊……………一三  
 石井 陽一……………一六  
 石井 陽一……………一七  
 利光 三津夫……………一八  
 手塚 豊……………一九  
 石 渡 哲……………二〇  
 石川 晃司……………二一  
 石川 晃司……………二二  
 石川 晃司……………二三  
 石川 晃司……………二四  
 石川 晃司……………二五  
 石川 晃司……………二六  
 石川 晃司……………二七  
 石川 晃司……………二八  
 石川 晃司……………二九  
 石川 晃司……………三〇  
 石川 晃司……………三一  
 石川 晃司……………三二  
 石川 晃司……………三三  
 石川 晃司……………三四  
 石川 晃司……………三五  
 石川 晃司……………三六  
 石川 晃司……………三七  
 石川 晃司……………三八  
 石川 晃司……………三九  
 石川 晃司……………四〇  
 石川 晃司……………四一  
 石川 晃司……………四二  
 石川 晃司……………四三  
 石川 晃司……………四四  
 石川 晃司……………四五  
 石川 晃司……………四六  
 石川 晃司……………四七  
 石川 晃司……………四八  
 石川 晃司……………四九  
 石川 晃司……………五〇  
 石川 晃司……………五一  
 石川 晃司……………五二  
 石川 晃司……………五三  
 石川 晃司……………五四  
 石川 晃司……………五五  
 石川 晃司……………五六  
 石川 晃司……………五七  
 石川 晃司……………五八  
 石川 晃司……………五九  
 石川 晃司……………六〇  
 石川 晃司……………六一  
 石川 晃司……………六二  
 石川 晃司……………六三  
 石川 晃司……………六四  
 石川 晃司……………六五  
 石川 晃司……………六六  
 石川 晃司……………六七  
 石川 晃司……………六八  
 石川 晃司……………六九  
 石川 晃司……………七〇  
 石川 晃司……………七一  
 石川 晃司……………七二  
 石川 晃司……………七三  
 石川 晃司……………七四  
 石川 晃司……………七五  
 石川 晃司……………七六  
 石川 晃司……………七七  
 石川 晃司……………七八  
 石川 晃司……………七九  
 石川 晃司……………八〇  
 石川 晃司……………八一  
 石川 晃司……………八二  
 石川 晃司……………八三  
 石川 晃司……………八四  
 石川 晃司……………八五  
 石川 晃司……………八六  
 石川 晃司……………八七  
 石川 晃司……………八八  
 石川 晃司……………八九  
 石川 晃司……………九〇  
 石川 晃司……………九一  
 石川 晃司……………九二  
 石川 晃司……………九三  
 石川 晃司……………九四  
 石川 晃司……………九五  
 石川 晃司……………九六  
 石川 晃司……………九七  
 石川 晃司……………九八  
 石川 晃司……………九九  
 石川 晃司……………一〇〇

判例研究

〔商法〕

二八一	振出人欄にA <sub>2</sub> によりA <sub>1</sub> 会社と記載された手形につきY会社が自己を表示するためにA <sub>1</sub> 会社名義を使用したものと認めた事例	三	近藤龍司
二八二	隠れた取立委任裏書と人的抗弁	四	倉澤康一郎
二八三	民法上の組合の債権債務がその後組合員によって設立された株式会社へ承継されるとした事例	六	宮島清司
二八四	別会社の買収・新設による代表取締役の委任義務違反―山崎製パン事件第一審判決―	七	黄清溪
二八五	外航船による海上運送中の沈没事故につき堪航能力担保義務が尽されたとは認められなかった事例	八	林群弼
二八六	監査役の対第三者責任	九	岩瀬正通
二八七	従業員は退職時に従業員持株制度によって得た株式を会社に譲渡する旨の会社・従業員間の契約の効力	十一	鈴木千佳子
二八八	いわゆる休眠会社ないしはそれに準ずる会社については特段の事情のない限り商法四〇六条ノ二第一項第二号に該当し、解散判決をなすうるとした事例	十二	島原宏明
〔最高裁判例研究〕			
二五八	昭二八・四・二四第二小法廷決定・最高民集七卷四号四三七頁	三	大濱しのぶ
昭六一・七・一七第一小法廷判決・最高民集四〇卷五号九四一頁	三	花房博文	
二五九	昭二八・四・二三第一小法廷判決・最高民集七卷四号三九六頁	四	櫻本正樹
昭二八・四・三〇第一小法廷判決・最高民集七卷四号四五七頁	四	日向野弘毅	
二六〇	昭二八・四・一六第一小法廷判決・最高民集七卷四号三二二頁	六	安田保男
昭六一・五・三〇第二小法廷判決・最高民集四〇卷四号七二五頁	六	三木浩一	
二六一	昭二八・四・三〇第一小法廷判決・最高民集七卷四号四八〇頁	七	河正慶

紹介と批評

昭二八10	昭二八・五・一四第一小法廷判決・最高民集七卷五号五六五頁	七二〇	花房博
昭二八11	昭二八・五・二九第二小法廷判決・最高民集七卷五号六二三頁	八一〇	伊藤敏
昭六一八	昭六一・九・四第一小法廷判決・最高民集四〇卷六号一〇一三頁	八二四	笠原毅
昭六二3	昭六二・七・一七第三小法廷判決・最高民集四一卷五号一四〇二頁	九一七	坂原正
昭二八12	昭二八・六・二五第一小法廷判決・最高民集七卷六号七五三頁	一三三	河原正
昭六〇1	昭六〇・七・一九第二小法廷判決・最高民集三九卷五号一三二六頁	一三五	宗本正親
昭六二2	昭六二・七・三第二小法廷判決・最高民集四一卷五号一〇六八頁	一三〇	櫻本正
昭六二5	昭六二・一一・二六第一小法廷判決・判例時報一二六五号一四九頁	一三六	宗田親
ウエリントン・W・ニヤンゴニ著『国連システムにおけるアフリカ』	三〇〇	金子絵	
C・M・ホイ著『個人的自由の哲学——F・A・ハイエクの政治思想』	三二五	石丸徹	
アルトゥール・カウフマン編 ライトブルフ全集 一 『法哲学』第一巻	四二四	宮澤浩	
木村弘之亮著『租税証拠法の研究』	四三三	清永敬	
若槻泰雄著『発展途上国への移住の研究——ポリビアにおける日本移民』	六三〇	鶴木次	
小林茂・寺門征男・浦野正樹・店田廣文編著『都市化と居住環境の変容』	六一六	有末賢	
朴椿浩著『東アジアと海洋法』	七二〇	李昌偉	
エティエンヌ・バリリエ著『レ・プティ・カマラード——サルトルとアロンに関する試論』	七二〇	奈良和重	
手塚豊編著『近代日本史の新研究』VI	八二九	服藤弘	
パスカル・オリイ監修『新しい政治思想史』	九二六	奈良和重	
手塚豊著作集第九巻『明治法教育史の研究』	一三三	内池慶四郎	



石渡利康著 『北欧共同体の研究―北欧統合の機能的法構造―』	11	元	吉武彦
阪莖光男著 『株式会社法概説』	11	四	加美和照
K・ライター著、高山眞知子訳 『エスノメソドロジーとは何か』	11	五	霜野寿亮

特別記事

坂田仁君学位請求論文審査報告	14	元	
小此木政夫君学位請求論文審査報告	14	三	
須藤眞志君学位請求論文審査報告	14	四	
松井弘明君学位請求論文審査報告	14	五	
寺崎修君学位請求論文審査報告	14	二	
加藤富子君学位請求論文審査報告	14	六	
木村弘之亮君学位請求論文審査報告	14	四	
慶應義塾大学法学部政治学科の回顧と現況 ―政治学科開設九〇年にあたって―	15	七	堀江湛
大沢秀介君学位請求論文審査報告	17	六	
霜野寿亮君学位請求論文審査報告	17	三	
菊池理夫君学位請求論文審査報告	17	七	
松田和晃君学位請求論文審査報告	17	三	